

若きデューイのライブニッツ研究（Ⅱ）^①

酒 井 潔

〔前々号掲載分目次〕

はじめに

第一章 一八八〇年代のデューイの哲学修業と著作活動―ライブニッツ書の成立にいたるまで

一・一 『思弁哲学雑誌』への投稿

一・二 モリスとの出会い

一・三 「ドイツ哲学古典叢書」について

第二章 デューイのライブニッツ解釈

二・一 デューイ著『ライブニッツの人間知性新論』について

二・二 『ライブニッツの人間知性新論』各章の概要

第三章 デューイのライプニッツ解釈の特徴とそのライプニッツ研究史上の意義

三・一 ライプニッツ書への書評から

デューイのこのライプニッツ書が一八八八年五月に刊行されると、直ちに、同年終盤から翌年初頭にかけて書評誌に好意的な記事が掲載された。それらがどのような言葉で評しているかを、やや立ち入って見ておこう：

『好意的なものとして』 New Englander and Yale Review 誌に L.G.T.Ladd があらわした書評があげられる。⁵⁶ (New Englander and Yale Review, L. Jan. 1889, pp. 66-68)。⁵⁷ 『言頭ひちひて述べらるる』：“The different numbers of the series of Philosophical Classics to which this book belongs, differ in merit; but among the more excellent none is better than this one by Professor Dewey”. 次いで目次の概略を紹介し、本書を構成する諸章が「並外れてよく出来ており」ために本書によって大学の上級生のゼミを行い、彼らを「偉大なドイツの思想家の実際の言説についての明快な概念によつて」本書のあらゆる側面にいかなうことが出来るだろうと述べる。⁵⁸ 続く文章も「用ひつゝなう」：“The excellence of clear exposition renders this book particularly valuable; for Leibnitz himself produced no body of philosophical writings, which set forth his views in a systematic way; and even the “Nouveaux Essais”, as Professor Dewey says, “is a compendium of comments, rather than a connected argument or exposition”. Leibnitz, then, has peculiar need of popular and yet critical exposition”.⁵⁹ また G.C.Robertson の「ひたす」 Mind 誌上の新刊紹介に「ひたす」(Mind, Oct. 1888, No. 52)：“In explaining the famous controversial treatise, Prof. Dewey has to keep his eye at once on Locke, against whom

it is directed, and on the manifold occasional (none of them systematic) expositions of Leibniz's characteristic ideas, which are all through implied but seldom expressly declared in the *Nouveaux Essais*. The result is that he manages to make of the volume a very welcome guide to the comprehension of Leibniz generally ...” (p. 612).

デューイのライプニッツ書は「ドイツ古典哲学叢書」の他の巻に較べても評価は上々であった。また七年後 J・H・タフツもシカゴ大学学長ハーバーに宛てて “It is more than a clear historical exposition” と賞賛している。⁽²⁾

しかしながらデューイの本書に問題がないわけではない。まず内容にかんして、また書評を最初に見ておこう。先ほどあげた *New Englander and Yale Review* 誌上の L.G.T.Ladd の書評では、讃辞と同時に若干の批判が述べられている。それは、ライプニッツがカントの『純粹理性批判』に与えた肯定的な影響をデューイが過大視しているとする旨の批判である。『純粹理性批判』の中の「反省概念の多義性について」の箇所をみれば、カントがライプニッツの方法も原理的な結論も完全に断ち切ろうとしていることは明白だという。だからエーベルハルトが、ライプニッツ哲学は近代人と同様に理性の批判を含んでいると主張してきたとして、カントが一見エーベルハルトを肯定するような言い方をするのは、じつは皮肉であって、カントは言外にエーベルハルトを否定しているのだ。⁽³⁾ 当時、古い保守派が新しい批判主義に抵抗して破れた後について転向し、批判主義の結論が自分たちのものだと言いつ張ったのだとすれば、エーベルハルトがその最初または最後の場合だった、とこの書評者は言うのである。

これより丁寧な批判をわれわれは *Science*, vol. XII, No. 298, October 19, 1888, p. 188f. に見出す。まず評者は、英語読者のための「ドイツ古典哲学叢書」という企画は、それが哲学者の思想を完全に叙述することよりも、主著の一部を念頭においている点に、その長所とともにまた短所をも持つ、と指摘する。ライプニッツのように多岐にわた

る活動をした哲学者の場合には、そのような企画はまさに諸刃の剣であるだろう。それでデューイも計画を拡大する必要に気付き、『人間知性新論』にあらわされていないライプニッツの教説についても若干の説明をしていると言う。しかし、評者のみるところ、デューイはモナド論と予定調和論に多くを割きすぎたのに比し、神の善性と悪の存在とを調停するライプニッツの試みには触れていない。そしてライプニッツとロックの論争である『人間知性新論』を扱いつつながらデューイはじつは彼自身の哲学的立場を開陳しているのだ、と評者は批判する。「彼(＝デューイ)はカントとヘーゲルの弟子であり、ライプニッツを両者の先駆者と見なすのに対し、ロックの著書は彼の眼には誤謬の織物と大差ない。ロックについてもっと高い評価をするわれわれのなかには、デューイ教授がこのイギリスの哲学者に意図的な不正を加えたのではないと確信してはいるものの、その思想を必ずしも正しく紹介してはいないと考える人々もいるかもしれない。また彼は、ライプニッツの思想を彼自身のそれと結びつけたという強い願望を示しており、これをやろうとして、しばしば少し誇張にみえるような解釈を行っている」(ibid)。それであるから、デューイのこのライプニッツ書の読者としては、筆者デューイの哲学的立場を応分に割り引いておけば、同書によって、ライプニッツの主な教説をロックに対して、同時に後のドイツの思想家たちとの関係においてうまく理解できるだろう。とにかく「ドイツ古典哲学叢書」は、英語しかできない読者にドイツ思想の成果に親しく触れさせてくれる点できわめて有益であろうと、評者は締めくくっている。

いま、評者のこの批判が所謂客観的にどの程度当たっているかは別にして、このScience誌の評者の眼には、デューイが「カントとヘーゲルの弟子」であり、同じ英語圏のロック哲学に対して、他意はないであろうがきわめて否定的であり、そして(カントとヘーゲルの先駆者でもある)ライプニッツの思想に自らを重ね合わせたいほどライプニッツにきわめて好意的であると映っていることそれ自体が重要であるだろう。

三・二 デューイのライプニッツ書の形式・方法上の不備

以上が出版当時の書評に見えるライプニッツ書への批判であるが、それとは別に同書は、いまわれわれが見ても、すでにその形式面にいくつかの問題を含んでいる。

本書を通覧して何より目につくのは、本書にはライプニッツの複数の著作から引用が数多く、しかもしばしばかなり長い部分が引用されているにもかかわらず、出典や引用箇所などの記載が一切ないことである。デューイが依拠したライプニッツ原典についても明記されていないために、より厳密に言えば、エルトマン版ライプニッツ哲学全集⁽⁴⁾を用いたはずだ、という推定に留まるのである。⁽⁵⁾この点について、われわれは先に（本稿二頁）あげたMind誌上の短い新刊紹介の、その最後の箇所にも言及されていたことを看過することはできない。すなわち、そこでは、当時ゲルハルト版ライプニッツ哲学著作集の第五巻として一八八二年に出版されたばかりの『人間知性新論』の新しいテキストについて、デューイがこれを使う機会をもたなかったようだと記されているのである。

ともあれ、テキスト及び引用箇所が明記されていないことは、読者や研究者にとって不便であり、残念である。本書の学術的な価値を損ないかねない要因であることは間違いない。ちなみに、ほぼ同じ時期にデューイ自身が執筆し、ハリス主宰の『思弁哲学雑誌』に掲載された諸論文を見るならば、スピノザ論文では（一）付きで、『エチカ』の各定理等の番号が記載され、カント論文では脚注に、ローゼンクランツ版著作集を用いた旨と、その頁付けが明記されているのである。

にもかかわらず、何故このライプニッツ書では出典・引用箇所などの明記がなされていないのであろうか。三つの理由が推定されよう…第一に、デューイがこの「ドイツ古典哲学叢書」の趣旨を、文字通り「英語圏の読者及び学生

のための」(for English Readers and Students) 所謂一般向けの「啓蒙書」と解して、出典・引用箇所の記事などをあえて割愛した可能性が考えられよう。第二に、既述の如く、デューイの本書執筆当時(一八八六—一八八八年)、ライプニッツの著作の内、英語訳の出来ていたものは、一八六七年『思弁哲学雑誌』創刊号(pp. 129-137)に発表されたヘッジによる『モナドロジー』、及び一八七一年の同誌第五号に出たE・クレীগーによる『唯一の宇宙精神の教説に関する考察』(原題: *Considerations sur la doctrine d'un esprit universel unique*)⁽⁶⁾があるだけであった。しかも後者にはW・T・ハリスが注を付し、読者に理解されなかった先の『モナドロジー』の内容を改めて解説しているほどである。(なおG・M・ダンカン⁽⁷⁾の画期的な英語版選集が出るのは一八九〇年のことである)。ラングレイによる『人間知性新論』の英語訳にしても、一八八七年一〇月の時点ではBook II, chap. 1+2が完成しただけで、まだ半分以上は未完成であり、したがってデューイのライプニッツ書の執筆にもほとんど助けにはならなかった。(ラングレイの訳業が一卷にまとめられて出版されたのはようやく一八九六年のことである)。このような状況にあって、『英語圏の読者と学生』のための本叢書本巻において、仮にライプニッツ原典の引用箇所等を併記したとしても、はたしてどれだけの効果が期待されたであろうか(しかもほとんどの学生はフランス語もラテン語も知らない)——そのようなデューイが考えなかったと断定する理由をわれわれは持たない。そして第三に、時間的な逼迫が考えられる。一八八六年にモリスから執筆の依頼を受けた後、本書は遅くとも一八八八年六月八日には製本され、国会図書館に届けられている。とすれば、執筆期間はどんなに長めに見積もっても二年を超えることはなかったであろう。僅か二年弱で一八〇頁のモノグラフィを脱稿したことになる。これは元来多作といわれたデューイといえあまりにも短い。そのため引用箇所などをそのつど確認し明記するだけの時間的余裕がなかったのかもしれない。

以上のように本書は出典や引用箇所の記載を欠くものの、だからといってデューイのライプニッツのテキストの読

みそのものが不十分だとか不精確なものだったわけで決してない。デューイはエルトマン版ライプニッツ哲学全集所収のいくつかのフランス語やラテン語の論文を読みこなしていた。ラングレイなども、彼の『人間知性新論』英語訳のなかで、ゲルハルト版ライプニッツ哲学的著作集第五卷（一八八二年に刊行されたばかりであった）における『人間知性新論』フランス語原文のうちの或る箇所の解釈に関して、次節にみるように、エルトマンやデューイの先行業績を指示しているほどである。

三・三 ラングレイ訳『人間知性新論』とデューイのライプニッツ書

ラングレイの英訳書 *New Essays concerning Human Understanding*, by Gottfried Wilhelm Leibnitz, Together with an Appendix consisting of Some of his Shorter Pieces. Translated from the Original Latin, French and German, with Notes, by Alfred Gideon Langley, 1896, 3rd Edition 1949 は、詳細な訳注を付した本体の訳六二九頁に続いて、ライプニッツのさまざまな小論文を収めた「付録」九〇頁、「補遺と訂正」五五頁、詳細な「索引」八五頁を加え、総計八六一頁に及ぶ大作である。全巻中、「デューイ」は八箇所で、いずれも彼のライプニッツ書に關して言及されている。ラングレイは訳出にあたって、デューイの同書を精読し、その解釈を随所に参考にしてゐるのである。

いまその一例としてラングレイの訳書二二八頁を見てみよう。『人間知性新論』第二卷（「觀念について」）第四章（「固さについて」）におけるテオフィル（ライプニッツの代弁者）の台詞の冒頭にある文“*But I hold at the same time that the ideas of extension and solidity, like that of scarlet-color, do not consist in an I know not what*”⁽⁸⁾における“*I know not what*”に、ラングレイは以下のような注（同頁訳注三）を付している。「ライプニッツの表現

は「それが何かを私は知らないようなもの」(un je ne sais quoi)である。シャルシュミットはそれを「思惟され得ない或るもの」(ein undenkbares Etwas)と訳している。それは無規定な何ものかと同義であるように思われる。これは事物の最後の本質であり、個物の原因であり、個別化に際して個物になるのである。そしてライブニッツは、延長と固さの観念は判明である、と言おうと考えている」。ここでデューイのライブニッツ書(ドイツ古典叢書版)の一二四頁が指示されている。⁽⁹⁾この箇所は第七章「物質及びその精神への関係」で、冒頭、ロックによる物質と複合観念の説明、そして英国経験論における自然の特徴の哲学的定礎について述べたのに続いて、空間と物質がふたつの完全に判明な観念であることを論じる文脈である。ロックによれば真空は存在し、空間は必ずしも物体の充実である必要はない。物体は空間を満たすものであるが、空間が充たされていないがままに空間には無差別である。空間は物質によって占有されるが、両者のあいだに本質的な関係はない。この限りでライブニッツにはロックを否定する理由はない。兩人とも、空間(延長)を物質と同一視したデカルトに反対である。⁽¹⁰⁾しかしライブニッツはそういう空間と物質とが、それが何であるかわからないような或る一つのもののうちに存するのではなく、相互に判明な観念であると主張するのである。デューイは次のように書いている…「空間の観念は、それがスカーレット色の観念から判別されるのと同様、固さの観念から判別される。たしかに、固さは延長なしには存在できず、スカーレット色も延長なしに存在できないが、しかしこのことは両者が判明な観念であることを妨げない」。⁽¹¹⁾

ちなみに、先に引用したラングレイの訳注で言及されているシャルシュミットのドイツ語訳を見ておこう (*Neue Abhandlungen über den menschlichen Verstand*, hrsg. v. Carl Scharrschmidt, Leipzig 1873, S. 101, 2. Aufl. Leipzig 1904, S. 97)。そこでは次のように訳出されている: "Ich nehme aber zugleich an, dass die Vorstellungen der Ausdehnung und der Dichtigkeit nicht, wie die des Schalachs, in einem undenkbaren Etwas bestehen"。懸

案の言葉「それが何かを私は知らないようなもの」*un je ne sais quoi*はそいつでは、繰り返すように、「思惟され得ない或るもの」と訳されている。

後に出たカッシーラーのドイツ語訳 (*Neue Abhandlungen über den menschlichen Verstand*, übersetzt, eingeleitet und erläutert von Ernst Cassirer, Leipzig 1915, Nachdruck: Hamburg (Phil. Biblio.) 1971 は全体と) プシヤルシュミット訳を参照している。だがいま問題になっている箇所 (S. 105) を見るに、*“in einem undefinierbaren Etwas”*「定義され得ない或るもののうちに」と訳されているのである。ただし、この「定義され得ない」という独自の表現には、「汎論理主義」(Panlogismus) に属するといわれるカッシーラー自身の立場がよく示されているように思われる。

三・四 イギリスのライプニッツ研究史

現代のイギリスを代表するライプニッツ研究者の一人 G・M・ロスは、従来イギリス或いは英語圏では一般的にみてライプニッツは冷遇され無視されてきたと述べ、その理由として次の三つの点を挙げている⁽¹²⁾：

一、ショーヴィニズム、孤立主義の雰囲気(微積分発見をめぐる、ニュートンとの、国民感情をも巻き込んだ優先権争いの後遺症もあるであろう)。

二、オッカム以来の反形而上学、ノミナリズム、経験主義、唯物論の傾向。

ただし、この二については、英国哲学史のなかで二つだけ例外があるという。一つは十七世紀ケンブリッジのプラトニズムであり、もう一つは十九世紀後半のカント主義とヘーゲル主義である(当時のデューイのヘーゲル主義もこれに関連している)。

三、イギリスの大学教師や学生たちの場合も、フランス語もラテン語も出来ないことが多いのに、とにかくライプニッツの著作の英訳がなかなか為されなかったという事情(上記のように、ヘッジが最初の英訳『モナドロジ』を発表したのが一八六七年。ダンカンの選集は一八九〇年まで待たねばならない⁽¹⁴⁾)。

ちなみに、デューイが依拠したと推定されるライプニッツ原典は、既述の如く、エルトマン版、そしてゲルハルト版全七巻の一部である。しかしこれも先述のように、『人間知性新論』についてはデューイはゲルハルト版を使用していない。またクラークとの往復書簡を収録しているゲルハルト版第七巻が刊行されたのは、デューイのライプニッツ書の二年後一八九〇年のことである。

三・五 ラッセルのライプニッツ書の刊行 (一九〇〇年)

さて、デューイに遅れること十二年、ついに一九〇〇年B・ラッセルの『ライプニッツ哲学の批判的解説』*A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz — With an Appendix of Leading Passages*がロンドン (Cambridge University Press) で出版される⁽¹⁵⁾。類型としてみた場合、ライプニッツの哲学の内容をなすすべての細かな定理は少数の公理から論理的に演繹され得るというその主張は、一九〇一年のクレーテュラ⁽¹⁶⁾、一九〇二年のカッシーラーのライプニッツ研究書⁽¹⁷⁾とともに「汎論理主義」(Panlogismus) という新しい傾向を標榜し、ライプニッツ研究史を画する業績となる。ラッセルの論理主義的解釈は、少なくともその後の英国及び英語圏のライプニッツ研究に甚大な影響を与え、「論理家 (logician) としてのライプニッツ」という理解が支配的になる(最近ではG・H・R・パーキンソン⁽¹⁸⁾、N・レッシュナー等)。

ラッセルの『批判的解説』を見て目立つのは、引用箇所や使用テキスト等が詳細に明記されていること、そして巻

末付録においては、ライプニッツの原典から、本文の項目内容に合わせてその抜粋が、しかもすべて英語訳で印刷され、また事項と人名の索引も設けられているなど、研究者に多大な便宜をはかっている点である。それだけでも、このラッセルのライプニッツ書がデューイのライプニッツ書より多くの読者を得たことの理由になりうるのである。

しかしラッセルの右のような方法も結論も、デューイがちょうど批判し警告しておいたものであり、デューイの立場とは全体的結論でも個々の論点でも際立った対照を呈している。先に見たようにデューイは彼のライプニッツ書の最終章「批判と結論」において、ライプニッツがその方法としてスコラの形式論理を採用し、これに固執したが故に、鏡映によって宇宙とorganicに連関しあう「モナド」という彼固有の形而上学が損なわれ、絶えずスピノザ主義かアトミズムに陥る危険に曝されていると批判している。しかるにラッセルは、まさに論理学の、前提と帰結の演繹的関係こそライプニッツ哲学の真の価値であるという、ちょうどデューイとは正反対ともいべき批評を下すのである。その他、ラッセルの個別的な論証にも、デューイが否定したはずのものの焼き直しが至る所で見出される。いまその例を挙げるなら、ラッセルがideaとideaの關係として考えているものは、明らかに、デューイがexternalと評したロッキ的なそれである。⁽¹⁹⁾さらにまた、ideaを知られたものの、構成されたものと見做すラッセルの見方は、デューイがロッキについて批判していたその当の見方に他ならない。⁽²⁰⁾

それはともかく、一九〇〇年のラッセルの『ライプニッツ哲学の批判的解説』刊行以後、すっかり目立なくなってしまった感のあるデューイのライプニッツ書であるが、いま公平に見るなら、デューイの洞察や議論がライプニッツ研究全体の蓄積と射程に貢献している点も、少なからず存存すると言えよう。以下、簡潔に列記しておく(まず、デューイがヘーゲル哲学の立場からinter-monadicな關係をorganicなそれとして強調する、有機体論的でダイナミックスな歴史主義的解釈の可能性を示したことが挙げられるかもしれないが、これについては次の最終章で述べる)：

一、phenomena bene fundata ということの意味に着目し、モナドを物質的要素と同一視するような解釈（ウォルフに遡る）の誤りを正したこと（Dewey, p. 347f.）。

二、カントへ至る哲学史的な連続ないし発展を明確に取り出した点（例えば、無限分割のアンティノミーの観念性、現実存在と主観の関係等）。

三、「物体」や「運動」の概念のなかにシステム理論的な、あるいは organic な性格を発見した点（p. 361）。

四、ロック自身は世界と人間精神との実体的存在を信じており、ライプニッツと信条を共有していたのだ、という歴史的視点、もしくは解釈学的ともいえるような視点（p. 382）。

五、諸モナドの「一致」と「差異」の関係のその実質として、デューイは「デモクラシー」における「法」と「市民の尊厳」との関係を示唆するが、これによりライプニッツのモナド論の含む政治哲学的社会哲学的なバースペクティヴが開かれてこよう（p. 295）。

しかし以上のように積極的に評価され得る諸点の存する一方で、疑問を禁じ得ない点も若干存することをわれわれは認めねばならない。ここではそのうち次の二点にだけ言及する：

α) デューイは、ライプニッツにおけるいわゆる optimism を単なる楽天主義と同等視して、ショーペンハウアーの pessimism に対置させている。これはデューイらしい解釈ではあるが、ライプニッツの真意は、神によって唯一の現実存在 (existentia) へ移行せしめられたこの世界が、無数の可能世界のなかでは「最善」(optimus) であるという点に存するのであるから、デューイのそれはライプニッツ解釈としては誤りと言わざるを得ない。⁽²¹⁾

β) 『人間知性新論』の第四巻 (Des mois) におけるライプニッツの多彩な言語哲学に関してはデューイは関心が薄いように見えるが、この点は今日の哲学全般の傾向はもちろん、またライプニッツ研究の新しい成果と動向を見る

なら、たしかに物足りない感是否めないものである。⁽²⁾

第四章 デューイの哲学的立場とライブニッツ書

四・一 若きデューイのヘーゲル主義

デューイのライブニッツ書の三百頁近くに及ぶ叙述の中で繰り返し用いられ、彼のモナドロジー解釈の鍵概念ともいふべき最大のものは“organic”、次いで“relation”であるように思われる。「モナド」が「世界―内―存在する」とは、例えば後の現象学的解釈の系譜におけるように、主観がノエシスノエマの「志向的關係」として活動すること（フッサール）でもなく、現存在が「配慮」（Sorge）においてそのつど既に自己を見出していること（ハイデッガー）でもない。そうではなく、まさに個体が宇宙の organic な（全体組織の）部分で有る、という意味なのである。この他にもデューイのライブニッツ解釈を特徴づける鍵語としては、spiritual, internal, ethical, genetic, connexion, unity, life 等を挙げることができるであろう。

四・二 ヘーゲル主義の文脈におけるライブニッツ解釈

右にあげた鍵語を通覧して明らかにするのは、これらの語が単にライブニッツを解釈するためだけのものではなく、いずれもデューイ哲学そのものより発する根本概念でもあるということである。ここでは、若きデューイのヘーゲル主義とプラグマティズムの自然観という二つの点に絞って考える。

まずヘーゲル主義は、ライブニッツ書の至る箇所で見られる。一例をあげると：

- 一、 reality は system を構成するところの体系観 (p. 316)。
- 二、 物質は精神の現象であり、物質の活動の根源は精神 (spirit) である (p. 353)。
- 三、 個体モナドも差異の實在なる原理であるとして、ヘーゲルの(単なる欠如ではない)「否定」概念がデューイによって非常に高く評価される (p. 420)。

このときデューイは、ライブニッツを解釈することを通じて、ヘーゲル主義に立つ自分を見出している。

“... his clear perception that it was the negative element that differentiated God from the universe, intelligence from matter, might have brought him to a general anticipation not only of Kant, but of Hegel. But instead of transforming his method by this conception of negation, he allowed his assumed (i. e., dogmatic) method to evacuate his conception of its significance. It was Hegel who was really sufficiently in earnest with the idea to read it into the very notion of intelligence as a constituent organic element, not as a mere outward and formal limitation” (p. 420).

これらのコンセプトは、実在(＝自然)を何よりも生きた、歴史的な全体的統一として捉えるデューイ自身の立場でもある。形式論理や論理的整合性はデューイにとって、具体的生命の活力から最も隔たったもの、つまり「抽象」に過ぎず、それゆえ何の価値もないものである。ただし、ヘーゲルの「絶対」概念はデューイ自身の立場においてもまた彼のライブニッツ書においても決して受容されていない、という点を看過してはならないであろう。

次にプラグマティズムの自然観であるが、デューイにとって「自然」とは物理的自然をその一部として含むところの、より広く根源的な生命体の連関である。そしてそういう「自然」は人間精神の外部にあってこれに対峙するのではない。むしろ自然は、精神的なものの自己超越の、自己実現のための契機であり、そのような意味で「道具」(in-

strument) なのである。ライプニッツ書終盤にある次の一文はきわめて示唆に富んでいる。「自然は、それが機能を形成し、目的を実現することにおいて道具的であり、そして、自然なくしては精神や有機的なものは空虚な夢である」という意味において道具的である」(p. 413)

四・ニ ラッセルのライプニッツ書における「ヘーゲル」

ラッセルのライプニッツ書には「デューイ」は一回も言及されていないし、ラッセルがデューイのライプニッツ書を読んだ形跡もない。僅か十二年前に同じ英語圏のアメリカで刊行されたばかりのデューイの同書の内容をラッセルは知らなかったのだろうか、あるいは意図的に無視したのだろうか。いずれにしても驚くべきことである。

これに比し、若きデューイがそこから養分や刺激を汲み取っていたヘーゲルについては、ラッセルは十分に意識していた、ただしデューイとはまったく反対の仕方である。ラッセルは『ライプニッツ哲学の批判的解説』のなかで「ヘーゲル」の名を二箇所であげている。²³⁾

まず同書第九章「連続の迷宮」(The Labyrinth of the Continuum)の冒頭において、ライプニッツが一方で物質の恣意的な限らない分割を認めながら、同時にモナドの「現実的無限」(actual infinite)——これは一般には承認し難いものと見なされている——を信じたがために、「連続の合成の迷宮」に陥ったとラッセルは断定している。「ライプニッツは、モナドの実存と性質を、主に連続を説明する必要から演繹していることを、自認している」(*ibid.* p. 108)。

これに続けて、まさにこのライプニッツの誤謬の再来として衆目の一致する哲学がヘーゲルである、というしかたで言及されるのである。すなわちラッセルは、現実に分かたれた無数の諸モナドという想定は、「ヘーゲル主義者な

ら偽の無限 (the false infinite) と呼ぶであらうもの」(後にヘーゲルによって使用された真の無限と偽の無限との区別 (the distinction between the true and false infinite) (p. 109) を先取りしていると言いたいのである。そしてヘーゲルとのこうした類似こそがライプニッツの論証を理解する役割をはたすかもしれないと言う。かくてラッセルの結論は、第一に、ライプニッツは「連続」の問題において、抽象は曲解だという本質的にヘーゲル主義的な見解をもつように思われる、第二に、モナド論の演繹は弁証法的な論証に酷似している、というものである (p. 110)。要するに、ラッセルのライプニッツ解釈においてヘーゲルに言及されるのは、ライプニッツの連続論が誤謬に陥っていることを示すためなのである。

ラッセルが「ヘーゲル」を名指しているもうひとつの箇所は、ラッセルが、ライプニッツが諸モナドについて考えた際に、汎神論が神に与えた高位から神はおとしめられねばならないだけでなく、神は少なくとも「諸モナドの一つ」として語られているとして、ライプニッツの二箇所の文章 (GP. III636, VII502) を「不注意」(slip)だと述べている文脈である (p. 187)。「モナドのモナド」という伝統的な言い方はライプニッツのテクストには見当たらないとラッセルは指摘する。そしてライプニッツが「モナドのモナド」という言い方をしたとヘーゲルも誤って想像してしまった、しかもヘーゲル以後の著者たちも「ヘーゲルの想像に何らかの権威があるものと早合点していた」ように思われる、とラッセルは言うのである (p. 188)。モナドが連続と関係させられている以上、そのようなモナドのひとつとして神を定義するのは明らかに矛盾である。「神とはほとんど同じモナドがあり得ないことは明白である」(ibid.)。続けてラッセルは、ライプニッツがその神学によって陥っている矛盾と彼が見なす点を枚举しようとするのである。このようなラッセルの言い方そのもののなかには、デューイとはまったく異なるヘーゲル観——一言で言えば、否定さるべき誤謬としてのヘーゲル観——が見出される。

ヘーゲルに対するデューイとラッセルとのあいだの、こうした温度差というよりトーンの相違は、そのままライブニッツに対する両者のトーンの相違でもある。ラッセルのライブニッツ書の最終十六章「ライブニッツの倫理学」は、まさにその批判的というよりはむしろ悪意に満ちたとすら言えそうな周知の文章で終わっている。「しかし彼（ライブニッツ）は罪と地獄とを支持し、そして教会に関する事においては、無知と反啓蒙主義の擁護者にとどまることのほうを選んだ。これこそ、彼の哲学の最良の諸部分が何故に最も抽象的であり、また人間生活に最も身近にかかわる諸部分が最悪であるかということの理由である」⁽²⁴⁾。

これに対し、デューイのライブニッツ書の最終第十二章「批判と結論」の最後の段落は、方法に関してライブニッツがおかした失敗が、彼の輝かしい成功 (his splendid achievements) を帳消しにすると考えてはならないだろう、という書き出しで始まる。そして、実体が活動性であり、そのプロセスは目的によって測られるという思想、宇宙は相互に関係づけられた統一であるというアイディア、有機体論、連続、法の一様性 (uniformity) などの思想は不滅 (imperishable) だと言う。彼の思想の開かれた大きさ (open largeness)、無尽蔵の豊饒性 (unexhausted fertility) にかんしてライブニッツに比肩する名は、思想の歴史には三〇四人しかいない。そして広い意味で、カント及びその継承者たちの仕事は、ライブニッツの客観的観念論を正当化する (justify the objective idealism of Leibniz) ような方法の発見であった、とデューイが結論するとき、デューイはラッセルの正反対の位置にある。

デューイにとっても、ライブニッツが方法として採用した論理学、あるいは論理的前提というものと、彼のモナド論の形而上学とのあいだに齟齬があることは、すでにわれわれが本稿第二章一・二で述べたように、もちろん看過されては⁽²⁵⁾ない。しかし所謂「汎論理主義」(Panlogismus) の立場からその齟齬を否定的に見るラッセルに⁽²⁶⁾対し、デューイはライブニッツの形而上学の諸契機をむしろ正当に評価しようとする。そして、しかし哲学が単に真

理を所有するだけでは満足せず、これを論証しようとすることが知性の真面目さにとって責務となるという見地からすれば、カントやヘーゲルのドイツ観念論はライプニッツの論理学に代わる方法を模索しつつ、ライプニッツの思惟契機をさらに深め活かそうとする真摯な努力であると、彼はライプニッツ書最終章において評価するのである。⁽²⁷⁾

ライプニッツ研究史では、デューイのライプニッツ書は十二年後のラッセルのライプニッツ書、それに続くクレーユラ、カッシーラーらの汎論理主義的研究によって表舞台から消えて久しい感があつた。しかし一九九〇年以降の世界のライプニッツ研究は、そうした論理学や数学など狭義の合理主義に偏った従来の段階から脱して、それまでは少なかった合理主義以外の研究が活況を呈するようになってきているのである。⁽²⁸⁾二〇〇六年七月二十四日から同二九日までハノーファー大学(同年七月一日より「G・W・ライプニッツ大学」に改称)で開催された第八回国際ライプニッツ会議でも、実践哲学、倫理学、政治哲学、弁論論などについての研究が活発に行われている現状が肌感じられた。アメリカから多数参加した研究者も、形而上学や哲学史を主な領域としており、かつての一九六〇～一九八〇年代の分析哲学全盛だった時の彼の地の傾向は、ラッセルのライプニッツ書と同様に過去のものとなりつつある。⁽²⁹⁾

このような展開(脱「合理主義」的転回とも言えようか)のなかで、近い将来デューイのライプニッツ研究の再評価が少なくとも欧米の学会では現実のものとなりそうな気配は十分にあるように思われる。

結 語

ところで、先にも引いたG・M・ロスは、内的にorganicなものとしての物質的世界というライプニッツの見方は、原子論的唯物論を、より全体論的な自然理解によって置き換えようとする最近の一群の科学者や哲学者たちによ

って再評価されるようになってきていると述べている。このことは、十九世紀に新たな物理学の登場に際して活発な論議があったことにも既に示されている。ライプニッツの潜在的な貢献については、J.C.Smuts, *Holism and Evolution*, 1926 や A.N.Whitehead, *Science and Modern World*, 1926 においても述べられている。もしそうだとすれば、デューイのライプニッツ解釈は、ラッセル以来のイギリスの伝統となった観の強い論理主義よりも、むしろ最もモダンな面を含むとさえ言うことができるだろう。

かくてわれわれは再び「哲学史」及び「哲学史研究」との意義への問いに還ってくる。ライプニッツを始めとするドイツ人の哲学者カント、ヘーゲルらの哲学史についての一八八〇年代のデューイの一連の研究は、若きデューイの思想遍歴の一こまであり、風疹のように一過性のものに過ぎないのであるか。或いは、それは当時のアメリカ社会における、ドイツ移民とドイツ文化の流入という外面的社会的事情に相応したものでしかなく、思想的哲学的にはいわば無視し得るような挿話なのであるか。否である、とわれわれは言いたい。デューイ自身の思想的傾向のなかに豊富な歴史感覚が、つまり實在の連続・発展・変化という歴史的把握が存したのであり、ヘーゲル哲学への親近感はずとして内在的なものであった。したがってそれは、過去は誤謬に満ちており、学ぶ必要はない、それはデパートの陳列品のようなものだ、というような反歴史主義とも違う。あるいは「ライプニッツ」という名のもとでわれわれは、或る教説においてよく似た一人の可能的な哲学者に言及するのであって、歴史上の實在人物とは必ずしも同一である必要はない（ストローソン^③）などといった極端な非歴史主義とも違う。つまりイギリス哲学の思考枠からまったく自由な所に、アメリカの哲学者デューイの思索空間は開かれていたのである。そして百二十年近くを経た今日のアメリカ哲学界における、ライプニッツをはじめ、スピノザ、カント、ハイデッガー、あるいは中世哲学などとの多岐にわたる旺盛な哲学史的取り組みは、このことと無関係ではないようにも思われる。

[完]

付記:

前々号本稿(Ⅰ)において付記したように、本稿の原形は日本デューイ学会中国支部例会での発表原稿(一九九三年十二月十一日於岡山大学教育学部)であったが、今回の寄稿にあたって(Ⅰ)、(Ⅱ)とも大幅な加筆・修正を行った。その後に入手した資料や、発表された研究論文などについても言及するように努めた。とくにこの(Ⅱ)においては原形をほとんどとどめないうえに稿を全面的に改めた。さらに注を大幅に追加した。

注

- (1) 酒井潔「若きデューイのライプニッツ研究(Ⅰ)」『学習院大学文学部研究年報』第五一輯、二〇〇五年三月、一―二三頁。
- (2) Vgl. George Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey*, intr. by Harold Taylor, ed. by Jo Ann Boydston, Southern Illinois Univ. Press, 1973, p. 56, 340.
- (3) Immanuel Kant, *Über eine Entdeckung, nach der alle neue Kritik der reinen Vernunft durch eine ältere entbehrlich gemacht werden soll*, Akad. Ausg. Bd. VIII, S. 185-251, bes. S. 187.
- (4) Gottfried Wilhelm Leibniz Opera omnia philosophica, hrsg. v. Erdmann, Berlin 1840.
- (5) 本稿(一)「第八頁参照」。
- (6) *Considerations on the Doctrine of a Universal Spirit*, trsl. by A. E. Kroeger, in: *Journal of Speculative Philosophy*, 5 (1871).
- (7) *The Philosophical Works of Leibnitz*, trsl. & ed. by G. M. Duncun, New Haven 1890. なおデューイ以前の、ヘッジとトリーを中心とした、十九世紀後半のアメリカ哲学におけるライプニッツの受容史については、本稿(Ⅰ)「付記」にあげたマルヴァニの論文 *Frederic Henry Hedge, H.A.P. Torrey, and the Early Reception of Leibniz in America* (1996) に詳しい。
- (8) ライプニッツの原文は「Mais je tiens en même temps, que les idées de l'étendue et de la solidité ne consistent

point dans un je ne say quoy comme celle de la couleur de l'écarlate" (GP, VII15) である。

- (9) 本稿における引用が依拠している John Dewey: 'The Early Works, vol. I, 1969 年 11 月 31 日 313 頁以下。
- (10) Descartes, *Principia philosophiae*, pars II (AT, VIII-1)。
- (11) この引用符は、それがライプニッツのテクストからの引用であることを意味するのだろうか。しかしライプニッツの『人間知性新論』にはこの通りの文章は見当たらない。
- (12) たしかに、イギリスのライプニッツ研究はドイツ、イタリア、フランス、アメリカはおろか、スペイン、イスラエル、中国ロシアのそれに較べても、研究者の数でも劣り、低調との感拭えない。筆者がこれまで参加した四回の国際ライプニッツ会議 (1988, 1994, 2001, 2006) でもイギリスからの出席者は少なかった。一方米国のライプニッツ研究は盛況で現在は Rescher, Garber, Kuistad, Brown, Harts, Riley, Jolly, Razerford などが活躍している。また年一回発刊の研究雑誌 The Leibniz Review 4(1) 100 年十二月に於第十六号を数える。ちなみに近年は国際学会やシンポジウムもアメリカ各地で活発に開催されている。
- (13) George McDonald Ross, *Leibniz' Role as a Type in English-Language Philosophy*, in: *Studia Leibnitiana Supplementa*, XXVI, 1986。
- (14) 『形而上学叙説』等を収めた G・R・モントゴメリーの選集は一九〇二年に刊行される。
- (15) 同書の総頁数は三二二頁であるが、本文は二〇二頁にとどまる。二〇五〜二九九頁には「付録」としてゲルハルト版ライプニッツ哲学的著作集からの抜粋が主題別に印刷されている。三〇一〜三二二頁は索引である。前々号、本論文(Ⅰ)、一頁以下参照。
- (16) Louis Couturat, *La logique de Leibniz*, Paris 1901。
- (17) Ernst Cassirer, *Leibniz' System in seinen wissenschaftlichen Grundlagen*, Marburg 1902。
- (18) Vgl. G.H.R. Parkinson, *Logic and Reality in Leibniz's Metaphysics*, Oxford 1965/Hide Ishiguro, *Contingent Truths and Possible World*. In: *Leibniz Metaphysics and Philosophy of Science*, ed by R. S. Woolhouse, Oxford 1981/Benson Mates, *The Philosophy of Leibniz*, Oxford 1986。
- (19) Vgl., Russell, op. cit., p. 161。

- (20) Vgl. op. cit., p. 166.
- (21) ライブニッツの「最善世界」(mundus optimus) 概念の内包と外延については、酒井潔『世界と自我—ライブニッツ形而上学論攷』創文社一九八七年、第三部第四章第三節、及び「オプティミズムとペシミズムの彼岸—ライブニッツの場合」、『実存思想論集』第四集、理想社、一九九九年)を参照されたい。
- (22) クーテュラ以来シンタックス的な要素や記号論理への関心が強かったが、一九八〇年後半以降、ライブニッツの言語論における主にセマンティックな要素への関心から、とくに『人間知性新論』第三巻に見出される「自然言語」——実在的な意味を有する——を扱った研究がA・ハイネカムブやM・ダスカルによって展開される。
- (23) Bertrand Russell, *A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz*, London 1900, New Edition 1937, p. 109f, 188.
- (24) "But he preferred to support Sin and Hell, and to remain, in what concerned the Church, the champion of ignorance and obscurantism. This is the reason why the best parts of his philosophy are the most abstract, and the worst those which most nearly concern human life" (*ibid.*, p. 202)
- (25) 本稿(一)第二章11・11' 前々号一六頁参照。
- (26) Vgl. Russell, op. cit., Preface (Sep. 1900), chap. I, etc.
- (27) Vgl. Dewey, op. cit., p. 435.
- (28) このような、狭義の合理主義には属さない、より広いライブニッツ研究への導火線の一つとなったのが、マルセロ・ダスカルの提唱する"soft rationality"である。二〇〇一年の第七回国際ライブニッツ会議でも論議を呼んだ。そしてアメリカの研究雑誌 *The Leibniz Review*, vol. 13, 14, 2003, 2004 誌上での「ダスカルとハインリッヒ・シェーパースの興味深い論争にも発展した。『必然真理』の完全な認識は人間には不可能であるとして、従来の仕方で解された必然真理に依拠した数学、論理学を合理主義のモデルとするやり方をダスカルが批判するとき、そして有限な人間、そして社会において他者とともに生活する人間にとっての真理、必然、神を捉え直そうとダスカルが試みるとき、それとデューイの視点との距離はもはやそれほど遠くはないようにも思われる。
- (29) 酒井潔「第八回国際ライブニッツ会議に出席して—Novissima Leibnitiana」『創文』第四九三号、創文社、二〇〇六年十二月、一六一—二〇頁)を参照いただければ幸いである。

(30) P.F.Strawson, *Individuals: An Essay in Descriptive Metaphysics*, Garden City, 1963.

(哲学科 教授)

若きデューイのライプニッツ研究(Ⅱ)(酒井)